

歴史的分野における「教えて考えさせる指導」の工夫 —基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と活用を目指して—

長期研究員 佐藤良央

I 研究の趣旨

歴史的分野の学習では、歴史上の人物名や出来事などの歴史的事象そのものを覚えることは必要である。しかし、この知識・技能は断片的なものではなく、有機的に関連付けられたものでなければならない。「歴史の学習は暗記教科である」というイメージから、楽しく、具体的で、分かりやすい学習を通して、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得する手立てが必要であると考えた。

本研究主題が目指す「教えて考えさせる指導」とは、知識・技能の確実な習得にとどまることなく、それらを活用していく指導である。つまり、教えるべきところはしっかり教え、考えさせるところはしっかり考えさせる学習指導の在り方である。

この「しっかり教える」ということは、「教え込み」、「詰め込み」をすることではなく、より具体的に、分かりやすく、そして確実に基礎的・基本的な知識・技能の習得を目指すことである。そして、「しっかり考えさせる」学習を通して、習得した知識・技能を活用し、考える学習活動の一層の充実を図ることを目指すことである。

以上のことから、歴史的分野において、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と活用の手立てとして「教えて考えさせる指導」を行うことが有効なのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

歴史的分野の学習において、知識・技能の習得を図る「教える」場面と、知識・技能の活用を図る「考えさせる」場面を意図的に設定する「教えて考えさせる指導」を行えば、自分の考えを持ちながら問題解決的な学習に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と活用が図られるであろう。

2 研究の内容と実際

(1) 単元指導計画の作成

単元のねらいに沿って、学習内容の関連性と構造

化を図るため、「教える」場面と「考えさせる」場面を意図的に位置付ける単元指導計画を作成した。「教える」場面では、生徒に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、「考えさせる」場面では、身に付けた知識・技能を使って単元のねらいに迫る学習内容を展開した。さらに、歴史の流れを意識させるために、それぞれの場面における手立てを明示するとともに、そのバランスを考えた。このように、「教える」場面と「考えさせる」場面を繰り返し織り交ぜる学習方法を工夫することによって、知識・技能の習得と活用が図られるものと考えた。

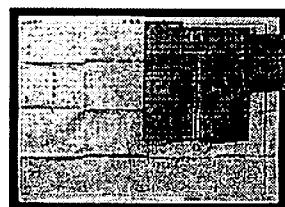
(2) 「教える」指導の実際

「教える」場面においては、具体的で、分かりやすい説明に努め、以下のような工夫をした。

- ① 理解を促すための発問、指示、説明の吟味
- ② 興味・関心を高める教材提示の工夫
- ③ 視覚的にイメージを持たせる工夫



手作りした木簡



平城京と学区との比較

(3) 「考えさせる」指導の実際

「考えさせる」場面においては、生徒の理解状態の把握に努めながら、習得した知識・技能を活用して、自分の考えをまとめさせたり、意見を交換させたり、話し合い活動をさせたりするなどの考える学習活動を実践した。

例えば、聖徳太子についての学習では、聖徳太子が行った三つの政策を丁寧に説明した後、どの政策が重要なのかを、生徒同士で話し合わせた。この活動により、政策の内容について自分なりの価値判断で意見を発表し合ったので、各政策に対する考えが深まった。

さらに、学習した知識・技能の活用を図るために、

単元の指導計画における活用の構想
単元名「平行・垂直と四角形」

時数	ねらい	活用の構想 ※活用の場
1 ・ 2	垂直の概念を理解し、その弁別ができる。	小学校区の地図を提示し、自分たちの町の道路の地図から直線のならび方を見付けられるよう教材化を図る。(※1)
3	垂直な直線のひき方を理解する。	既習事項の三角定規の直角を活用して、作図ができることに気付くことができるようにする。(※2)
4	平行の概念を理解し、その弁別ができる。	既習事項である直角の性質を用い、平行な2直線の定義を導いていけるようにする。(※2)
5	異なる直線の間の距離	身近感を醸成させるため教室の壊れた棚を模写す

図3 単元指導計画における活用の構想

(2) 算数への親近感や算数の有用性が感じられる適切な指導・援助の実例

具体的な指導・援助の例を二つを挙げる。

① 日常生活から算数への学習における指導・援助

平行な二直線の性質を見いだす場面において、壊れた棚をどうすれば直せるのかという身の回りの事象を教材化し、二枚の板を二直線に、くぎを二つの点に置き換え、平行な二直線の性質を見いだす学習課題につなげられるようにした(図4)。

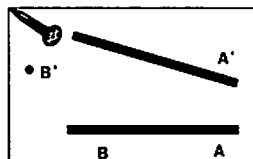


図4 棚の問題

さらに、他の時間でもできるだけ児童の身近な場面を授業の中で取り上げるようにした。

その結果、児童は嬉々として学習に取り組み、算数と日常生活とのかかわりに気付き、算数への親近感をより一層高め、算数をさらに使っていこうといった望ましい意識の変容に結び付いた。

② 算数の学習から日常の場面における指導・援助

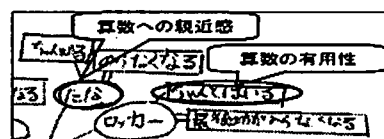
単元の終わりに、垂直や平行を学校生活の場面から見付ける学習を行った。その際、「もし天井や柱が垂直ではなかったらどうなるのか」と問いかけた。児童は、「柱が倒れてしまう」とか、「天井を支えきれない」などと口々にし、平行や垂直が自分の生活に生かされていることに気付くことができた。さらに授業の後も、この働きかけがきっかけとなり、地面と電柱、道路などに見られる垂直や平行の有用性を見だしていったのである。

算数と日常生活を結び付けた学習活動は、教科書でも数多く取り上げられている。その中で、教師が意図的に有用性に気付かせる働きかけをすることは、児童の活用の意識を高めるばかりでなく、算数をより活用する態度へと変化させていくことができるといえる。

Ⅲ 研究のまとめ

(1) 成果

図5は、単元終了後に、児童が書いた「平行」というキーワードから思い浮かぶことを連ねた、いわゆるイメージマップの一部である。これを見ると、「平行」というキーワードから、今まで気付かなかった日常の事象を数多くイメージしているのが分かる。つまり、単元の学習を通じ、算数の知識・技能が自らの日常生活と結び付いていること、さらに、その有用性にも気付いていることがうかがえる。このことは、学級のほとんどの児童に見られたことである。また、授業においても、これまで以上に学習内容と日常生活とを関連させながら考えたり、既習事項を活用しようとしたりするなど、自ら進んで算数を幅広く活用する態度への変容が見られた。これらのことから、算数を活用する力や態度をはぐくむ場を明確にし、その中で算数への親近感や算数の有用性に気付かせる指導・援助の方策を具体化し、繰り返すことは、児童の変容に有効に働いたと考えられる。



「活用のイメージ」と「活用の構想」を作成したことは、算数を活用する力や態度をはぐくむための見通しを持った指導が展開できるばかりでなく、その作成が容易であり、今後、学校へ普及も期待できるのではないかと考えられる。

(2) 今後の課題

一つ一つの教材の特徴や、児童の実態を十分に踏まえたものとはなっていない。日常生活や他教科などと算数の学習内容との関連をより一層明らかにし、「活用のイメージ」や「活用の構想」を改良し、学習活動をより吟味していく必要がある。

さらに、知識・理解・技能等の定着と活用する力とのかかわりについても、教材を開発したり、学習指導の展開を工夫したりするなど、実践を通しながら明らかにしていく必要がある。

〈引用・参考文献〉

- 1) 知識や技能を習得し、活用、探究する算数科の学習指導の工夫 吉川成夫著(初等教育資料 文部科学省 2007年6月号)

十七条の憲法を分析させ、「聖徳太子の願い」について、その背景や影響について話し合わせた。

歴史上の人物や出来事を学習するときには、「何をしたのか」、「なぜそうしたのか」、「その結果どうなったのか」、「影響はどうだったのか」などを考えさせることが大切である。そのため「考えさせる」場面においては、習得した人名や出来事の内容などをもとに、歴史的な原因や背景、結果や影響などについて考えさせることによって、知識・技能が活用され、生徒の考えがより深まり、歴史について考察する力や説明する力が身に付くものとする。

(4) 「教えて考えさせる指導」の結果

基礎的・基本的な知識・技能がきちんと身に付いたかを検証するため、形成的評価に重点を置き、一時間ごとに小テストを実施した。

設問の中には以下のような問題を出題した。

下は あるきまりの一部である。このきまりを何というか。
 一に曰く 和をもって貴しとなし、さからうこと(争う)ことなきを宗とせよ。

この問題の正解は「十七条の憲法」であり、正答率は90.6%と高い数値であった。その背景としては、授業において、資料である十七条の憲法を分析するという「考えさせる」活動を取り入れたため、習得した知識・技能が活用され、「教えて考えさせる指導」の成果となって表れたものとする。

下の表は、事前・事後アンケートの変容についてまとめたものの一部である。「話し合い活動」が理解を深める上で役立つと答えている割合が増えている。このアンケート結果からも、「話し合い活動」が、「考えさせる」場面において理解を深めることに役に立ったと、生徒自身も実感したことが読み取れる。

	すこく	わりと	少し	どちらとも いえない	あまり	ほとんど	全然
事前 (%)	1.9	49.0	32.1	17.0	0.0	0.0	0.0
事後 (%)	26.9	42.3	21.2	3.8	5.8	0.0	0.0

歴史の学習で「話し合い活動」は理解を深める上で役に立っていますか。

次に、生徒の授業後の感想やアンケートから「教えて考えさせる指導」について検証した。

生徒の授業後の感想には、学習したことと自分の経験を結び付けたものや、現在と過去を比較し自分

なりの考えを持ったもの、国力の違いに目を向けたものなど、思考の広がりや深まりが見られ、歴史について考察する力が高まったと考える。

また、「充実感・満足感」や「学習意欲」について毎回自己評価を行った結果、90%以上の生徒が肯定的に答えた。このことから、「教えて考えさせる指導」は情意面においても効果があることが分かった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- (1) 「教えて考えさせる指導」を行うに当たっては、単元のねらいに迫るために、学習内容の関連性と構造化を図った単元指導計画を作成し、「教える」場面と「考えさせる」場面の両面から具体的に計画して授業を行ったため、知識・技能の習得に一定の成果が見られた。
- (2) 語句を丁寧に説明することはもとより、具体物を提示してイメージを持たせることなどによって、生徒の興味・関心が高まり、疑問や課題を持って授業に臨むなど意欲的に授業に取り組むことができた。
- (3) 習得した知識・技能を活用し、自分で調べたことをもとに話し合い活動を繰り返し行ったことにより、生徒の考えに深まりと広がりが見られ、歴史について考察する力や説明する力が身に付いた。

2 課題

- (1) 小テストの結果、すべての問題において正答率が高かったわけではない。より確実な習得を図るため、生徒の理解状態をしっかりと把握し、その状態に応じて指導の在り方を修正し、個に応じた手立てを講じることに一層努めなければならない。
- (2) 「考えさせる」場面において、知識・技能を活用する活動を、より充実させる必要がある。そのためには、生徒の実態把握や教材研究を入念に行い、単元指導計画をさらに吟味することが大切である。
- (3) 歴史的分野における研究を行ったが、地理的分野や公民的分野、あるいは他教科においても「教えて考えさせる指導」は大切であるとする。そのため、何を教え、何を考えさせるのかについて、分野や教科等の特質を踏まえ、十分検討した上で取り組む必要がある。